

## 自己知と外在主義 ーバージを手がかりにー

中谷 真央

哲学における、心の存在をめぐる議論の中に、心の内容に関する外在主義という立場がある。心の内容に関する外在主義とは、ある個人が志向的な心の内容（心が何かに向けられている状態）を持つためには、その個人は、その個人の物理的および社会的環境と、必ず実在的な関係を持っていなければならないとする立場である。この主張は、内在主義的な考え、すなわちある個人の志向的な心の内容は、その個人の内在的な性質のみによってできるとする、デカルト以降の心の哲学の前提となっていた考えに一石を投じた。外在主義は、心そのものの存在に物理的環境あるいは社会的環境が不可欠かもしれないという哲学的問題を引き起こし、心のありかたをめぐる議論にさらなる広がりが生じることとなった。

心の内容に関する外在主義を認めたい場合に避けて通れない問題として、「自己知」との両立問題がある。心の内容は外在的なものによって個体化されるとする外在主義は、われわれが持つ、自己知が内在的に生起しているように思われる直感と矛盾するのではないかという問題である。そこで本研究では、この外在主義と自己知の両立問題について、アメリカの哲学者であり外在主義者であるタイラー・バージの論文を参考に、外在主義の中で自己知を正当化することは可能であるのかを考察することを目的とした。バージの主要論文と、主な反論であるシンシア・マクドナルドの論文、さらに先行研究として両者の議論を整理し新たな見解を与えている大沢秀介の論文について文献研究を行った。その結果、バージに対するマクドナルドの批判の検討から、バージの論証は論理的整合性がとれていないことが明らかになったのに加えて、大沢秀介によるバージを擁護する試みを検討しても、マクドナルドの提示した批判のほとんどは有効なまま残り続けてしまうことがわかった。論証が論理的でないという決定的な批判が有効であること、擁護の観点からみてもほとんどの批判が有効となってしまうことから、バージの両立論が成功しているとはいえないという結論にいたった。外在主義の中での自己知の正当化という問題に関して、バージとは異なる方法をとって両立論を支持するのか、また外在主義の中で自己知は正当化できないという立場をとるのか、あるいは自己知が正当化できない以上外在主義は認めるべきでないとして内在主義に立ち帰るのかは、今後この問題を考えるにあたっての課題となる。

(指導教員 横山幹子)